

「ムーアのパラドックス」と論理

小口裕史

I 「ムーアのパラドックス」と「主張の論理」

「ムーアのパラドックス」という呼称がウィトゲンシュタインによるものであることはよく知られている。そしてマルカムによれば、ウィトゲンシュタインは「自分に深い感銘を与えたムーアの唯一の仕事は、『雨が降っている、しかし私はそのことを信じていない』というような文に含まれている特殊な種類の無意味さ(the peculiar kind of nonsense)の発見である、とかつて論評した」という¹⁾。

「ムーアのパラドックス」は、ウィトゲンシュタインがムーア本人に宛てた手紙の中で賞賛したように、まさしく「一つの発見」であった。それはムーアが「主張の論理(the logic of assertion)について重要なことを述べた」からであり、このパラドックスが「論理は論理学者が考えているほど簡易ではないことを示している」からである。ムーアが提示した「不条理(absurdity)」は、「矛盾に類似している何ものか」ではあるが、論理学における矛盾ではない、というのである。この不条理は「排除されるべきであり、矛盾が排除されるのと同様に、『常識』によって実際に排除されている」²⁾。

では、その「常識」とは、そして、「主張の論理」とはいかなるものなのだろうか？ ウィトゲンシュタインは、「ムーアは彼のパラドックスを提示することによって、哲学という蜂の巣を突ついた」とも述べている³⁾。さらに、ムーアの「発見」は、オースティンとサールの言語行為論にとっても重大な意義をもつものであった。本稿では、言語行為論者が「ムーアのパラドックス」から引き出した教訓にも目を配りつつ、ウィトゲンシュタインの言う「主張の論理」に焦点を合わせて論じていく。

II ムーアが用いた背理法と「含意」

一般に、パラドックスは背理法(reductio ad absurdum)の形式をとる。すなわち、あることを仮定し、その仮定から矛盾が導出されることを示すことによって、当の仮定が誤っていることを証明する論法である。ムーアは、「ムーアのパラドックス」を解消不可能な謎としてただ放置したのではなく、このパラドックスを提出するにあたって背理法を用いている。われわれは、まずこの点を確認しておきたい。ムーアは、「雨が降っている、しかし私はそのことを信じていない」というような文の「不条理さ(absurdity)」を提示することによって、「主張する」という言語行為とこの行為が「含意する(imply)」こととを明確に区別したのである。

さて、本稿では、

(M) p 、しかし私は p ということを信じていない。(p , but I don't believe that p .)

という形式の文を、便宜的に「ムーア文」ないし「M - 文」と呼ぶことにする。そして、この M - 文を用いてなされる個々の主張を「M - 主張」と呼ぼう。

p に代入される文は、通常の有意味な文ならば何でもよい。その人称や時制には特に制限はない。偽な文であっても、真偽が確定していない文であっても構わない。よく使われる文は、

《1》 猫がマットの上にいる。(The cat is on the mat.)

《2》 雨が降っている。(It's raining.)

である。そして、それぞれの文に対応する M - 文は、

《M1》 猫がマットの上にいる、しかし私はそのことを信じていない。

《M2》 雨が降っている、しかし私はそのことを信じていない。

となる。

ここで、M - 文と M - 主張についてしばしば持たれる誤解を、あらかじめ取り除いておくことが必要だろう。

まず、 p ということをはかして知りうるのかという問題、 p という信念の由来(自分の経験、伝聞、想像など)や p ということ信じない理由などは、「ムーアのパラドックス」の眼目とは無関係である。例えば、《M2》の「雨が降っている、しかし私はそのことを信じていない」という M - 主張も可能であると見なし、その根拠として、発話者である私は一つも窓のない部屋の中にいるので、雨が降っている様子を自分の目で見て確かめることはできないうえに、この部屋は防音が完璧なので雨が屋根をたたく音を聞くこともできない、それゆえ雨が降っていると信じるための感覚的証拠が自分にはない……というようなことを挙げても無効なのである。なぜならば、この「雨が降っている」は、誰か他の人が言ったことを引用しているわけではないからである。M - 主張の前半だけが引用で、後半は自分の主張であるというのではない。

次に、私は「雨が降っている」を「真剣に(seriously)」ないし「誠実に(sincerely)」言ったが、その後の「しかし私はそのことを信じていない」は「真剣に」ないし「誠実に」言ったわけではない(あるいは逆に、「雨が降っている」は「真剣に」ないし「誠実に」言ったわけではないが、その後の「しかし私はそのことを信じていない」は「真剣に」ないし「誠実に」言った)という解釈も、「ムーアのパラドックス」の眼目を捉えそこなっている。なぜならば、M - 主張の前半だけが真剣に主張されたのであって、その後半は嘘ないしは冗談である(あるいは逆に、M - 主張の後半だけが真剣に主張されたのであって、その前半は嘘ないしは冗談である)と解釈するならば、そこには逆説的なことなど何もないことになってしまうからである。そこで、「ムーアのパラドックス」がパラドックスとして成り立つためには、M - 主張全体が「真剣に」(ないし「誠実に」)主張されたか、あるいはその全体が嘘(ないし冗談)であるか、このどちらかであると想定するほかないことになるわけである。ただし、M - 主張全体が「真剣な」主張なのか嘘なのかを発話者本人以外には知りえないということが、当の M - 主張を逆説的なものになっているわけではない。

ウィットゲンシュタインは、M - 主張が逆説的であるがゆえに、つまり日常の言語使用と信念帰属の「常識」に反するがゆえに、これを「ムーアのパラドックス」と呼んだ。オー

スティンは「ムーアのパラドックス」という呼称を用いてはいないが、サールはこの呼称を用いている⁹⁾。サールによれば、「ムーアのパラドックス」とは、「 p という命題と『私は p ということを信じていない』という命題とがたとえ不整合ではなくても、 p ということと私は p ということを信じていないということの両方を私が主張することはできない、というパラドックス」¹⁰⁾である。そして、「ムーアのパラドックス」から得た教訓を、オースティンは、「主張(assertion)は信念(belief)を含意する」¹¹⁾と的確に表現し、サールは「信念は主張という言葉行為の誠実性条件である」¹²⁾と捉えた。これらの教訓は、ある命題ないし文と、ある発話主体がその命題ないし文を用いておこなう個別的な言語行為との対比を際立たせるものでもあった。

さて、ここで、ムーア自身のテキストに即して、M - 文の特徴を考察してみよう。ムーア自身は、最初から M - 主張の「不条理さ」に注目してパラドックスを提出したわけではない。ムーアは、ある発話主体の「主張」の「含意」に注目したのであり、「含意」を度外視することによって「不条理」な文の形成とその発話が許容されてしまう、という論点を提示したのである。つまり、ムーア自身はパラドックスの解消に頭を悩ませたわけではないのである。

ムーアは、「私は映画を見に行つたと私が言うことは、私が映画を見に行つたと信じているということを含意する」のであり、それゆえに、「私はこの前の火曜日に映画を見に行つた、しかしそうしたことを私は覚えていない」と「言うのは全く不条理なこと(a perfectly absurd thing to say)」である、と指摘している¹³⁾。そして、「私が含意していることが、私が主張している内容(what I assert)の一部でないことは明らかである」と述べている¹⁴⁾。

例えば、私はこの前の火曜日に映画を見に行つた、とある日私が主張する場合、このことを主張することによって私は、私が映画を見に行つたことを、これを話したときに、信じているあるいは知っているということを含意している(imply)。そのこと〔＝映画を見に行つたこと〕を信じている、あるいは知っていると言っている(say)わけではないのだが¹⁵⁾。

ムーアによれば、M - 文は「論理的には全く可能」である¹⁶⁾。M - 文が「論理的には可能」であるとは、いかなることなのだろうか？ 《M1》と同様の、次の例文について考察してみよう。

《M1'》 縁側に猫がいる、しかし私はそのことを信じていない。

この M - 文の前半と後半とを切り離して、それぞれの文が意味する事態を考えてみればよい。「縁側に猫がいる」が意味する事態と、「私は縁側に猫がいると信じてはいない」が意味する事態とは両立可能なのである。実際にはわが家の縁側に一匹の猫がうずくまって日向ぼっこをしているにもかかわらず、私は縁側から離れた部屋の中にいて猫の姿を見ることができず、しかも猫が鳴き声を立てているわけでもないような場合、縁側に猫がいると思っていないことは十分にありうる。このように、「 p 」と「しかし私は p と信じていない」という 2 つの文がそれぞれ意味する事態だけを考慮することにすれば、M - 文は「論理的には全く可能」であることになる。M - 文で主張されている内容(what is asserted)、すなわち p であることと p と私が信じていないこととが両立可能だ、というのである。ただし、 p であることと、 p と私が信じていないこととが両立していると判断するのは、私自身の

一人称単数の視点からではなく、三人称の視点からなのである。この点をムーアは明確に述べてはいないが、ここでの人称の違いは決定的に重要である。M - 文が「論理的には可能」であるとは、すなわち、私以外の人が私に対して信念帰属をおこなう場合である。これは、「しかし私は p ということを信じていない」という文を、「しかし彼は p ということを信じていない」のような三人称の信念帰属文に書き換えてしまう場合である。要するに、M - 文を「私」という主体が口に出して「言う」ということ、M - 主張は「私」という主体によって発話されるということを閉却してしまえば、M - 文はまさしく「可能」になるわけである。

以上のように、M - 文が「論理的には可能」であるとは、発話主体である「私」による「主張」という言語行為の「含意」を無視することに他ならないのである。ある文(ないし命題)と、もうひとつの文(ないし命題)との間の無矛盾性、整合性が M - 文の問題点ではないということは、オースティンが指摘している通りである。「実際、 p ではなく、 $\dot{p}$ ということ¹¹⁹を主張することこそが、『(p ということを主張する)私が p ということを信じている』を含意する」のである¹²⁰。さらに5つの例文に即して、考えてみよう。

- 〔1〕 雨が降っている。
- 〔2〕 私は雨が降っていると信じている。
- 〔3〕 私は雨が降っていると信じていない。
- 〔4〕 雨が降っている、そして私は雨が降っていると信じている。
- 〔5〕 雨が降っている、しかし私は雨が降っていると信じていない。

文〔1〕そのものが文〔2〕を「含意する」わけではない。文〔1〕を私が発話することによって、文〔2〕が表現していることが「含意」されるのである。それゆえ、文〔1〕と文〔3〕の連言である文〔5〕を用いて私が主張という言語行為をおこなうことは、不条理なのである。そして、文〔4〕は、不条理ではないが、冗長なだけであろう。

ムーアの関心は、「主張すること」と「含意すること」との差異にあった。ムーアは、私が「主張すること」によって、すなわち「言うことによって(by saying)」、自分が信念あるいは知識を持っていることを「含意する」と考えているわけである。彼はまた、「嘘をつくこと(lying)」についても述べている。これは日常言語の用法の分析である。その意味では、言語行為論を展開したオースティンとサールが「ムーアのパラドックス」に注目したのは、当然と言えば当然であろう。オースティンとサールは、「主張する」という言語行為に注目しているだけでなく、「ムーアのパラドックス」をさらに約束や命令などへも一般化して考察を進めている。オースティンやサールの言語行為論の観点からは、「主張」、「信念」、「含意」、「誠実性」の間の関係が整理された。

オースティンによれば、主張することは信じることを含意しているのである¹²¹。この「常識」によれば、私が「 p 」と主張するとき、私は p であると信じていると見なされるのであるから、私が「 p 」と主張した直後に、続けて、「私は p と信じていない」と言うと、矛盾した主張をしていることになる。だが、この矛盾した主張をすることを禁ずるのは、構文論ではなく、「ある意味論的な規約」であるという。

私が「猫が敷物の上にいる、そして私はそのことを信じていない」と言うことができない理由は、

これが何らかの仕方で「自己矛盾的」であり、その意味で構文論に違反しているということではない。私がそのように言うことを禁止するのはむしろ、われわれが様々な語を様々な状況において用いる方法についての、ある意味論的な規約(勿論、暗黙の)である¹³⁾。

M - 文は、言わば偽造された文形式である。ムーアは、「主張」という言語行為の「含意」を無視すると「奇妙な(queer)」文すなわち M - 文の発話を許容することになってしまうことを示したのである。M - 文は、「主張」の「含意」を示すために、背理法的前提として仮定された文であるにすぎない。ムーアが背理法的思考を展開していることを、われわれは決して見逃してはならないのである。ここでムーアの背理法を再構成してみれば、以下のようになろう。

- ① 「 p 、しかし私は p ということを信じていない」という私の主張(=M - 主張)が有意味だと仮定しよう。
- ② すると、私には p という信念が帰属させられ、かつ、私には p という信念が帰属させられないことになる。なぜならば、通常は、私が「 p 」と言うときは私には p という信念が帰属させられ、私が「私は p ということを信じていない」と言うときは私には p という信念が帰属させられないからである。
- ③ しかし、これは不条理である。なぜならば、私は p ということを信じていると同時に、 p ということを信じていないことになるからである。
- ④ ゆえに、①の仮定が誤っている。「 p 、しかし私は p ということを信じていない」と私が主張することはできない。これはすなわち、私は「 p 」と言うことによって「私は p ということを信じている」ということを含意している、という論点を正当化するものである。

M - 主張が奇妙なのは、オースティンが簡潔に定式化してみせた、「主張することは信じることを含意している」という「常識」に反するからである。ムーア自身、M - 文を「言うのは全く不条理なこと」である、と明確に述べていた¹⁴⁾。ムーアは、「主張」という言語行為の「含意」を度外視した M - 文を「言う」こと、つまり「M - 主張する」ことの「不条理さ」を示すことによって、「主張」という言語行為の「含意」を、文と発話行為の関係を鮮明にしたのだった。すなわち、敢えて M - 文を提出して「主張」と「含意」との関係を分析したムーアの手法は、所謂「背理法(帰謬法)」に他ならないのである。

M - 文は極めて人工的な文であり、現実には誰一人として用いることがないものである。後述するように、M - 文が「通常の言語ゲーム」の中では決して使われないことをウィトゲンシュタインは的確に指摘している。彼は、M - 文が背理法的前提に用いる目的で捏造されたものであることを理解していた。つまり、ムーアの意図を正しく読み取っていたのである。ただし、ウィトゲンシュタインは「ムーアのパラドックス」について論じる際に、「含意」という表現を使ってはいない。彼の関心は、「主張」が「信念」を「含意する」とこと自体にあったというよりは、「信じる」の文法を解明することにあったと言えよう。この関心の重点の移動は重要な意味を持つ。そして、彼は発話者の「誠実性」というよりは「合

理性」、「人格の統一性」に関心を持っていたように見える。彼にとって「含意」に関する「常識」とは、「文法」、言語ゲームの規則に他ならない。ムーアは、発話者が単一の主体であることを疑うことさえなかったように見える。しかるにウィトゲンシュタインは、M - 主張を有意味なものに見なそうとすると、発話主体が単一であると想定している通常の「人格」概念を修正せざるを得なくなること、つまり発話主体の単一性が崩壊してしまうことを指摘することによって、M - 主張の「不条理さ」を示したのである。

Ⅲ マルカムによるウィトゲンシュタインの「ムーアのパラドックス」解釈

次に、マルカムによるウィトゲンシュタインの「ムーアのパラドックス」解釈を手掛かりに考察を進めることにしよう。

マルカムは、M - 文が「不可解(unintelligible)」であると指摘する。マルカムによれば、サールもムーアと同様に、致命的な過ちを犯している。その過ちとは、M - 文を「言う」のは不条理ないし「奇妙(odd)」なことではあるが、M - 文において言われている事柄は「理解可能(intelligible)」だ、と考えてしまうことである。M - 文の形式を持つ文を発話するのは不条理な言語行為ではあっても、その言明は有意味であって、われわれはこの言明を理解するだろう、と考えるのは間違いだというのである。つまり、M - 文は「不可解」であって、M - 文を用いた発話は「意味をなさない」のである。ところが、M - 文の

- (1) 仮定(supposition)は意味をなす。
- (2) 過去時制は意味をなす。
- (3) 三人称および二人称の形態は意味をなす。

という点に、マルカムは注目する。これら 3 点をそれぞれ言い換えれば、

- (1)' 主張と仮定との間には非対称性がある。
- (2)' M - 文は直説法 - 現在時制でのみ成立する。
- (3)' M - 文は一人称でのみ成立する。

ということになる。

これらの指摘が正しいことを確認するために、(1)、(2)、(3)のそれぞれについて例文を挙げておこう。

- (1)"「雨が降っている、しかし私はそのことを信じていない」と仮定しよう。
- (2)" 雨が降っていた、しかし私はそのことを信じていなかった。
- (3)" 雨が降っている、しかし彼女はそのことを信じていない。

雨が降っている、しかし君はそのことを信じていない。

これら 4 つの文が有意味であることは直観的に明らかであろう。ただし、(1)" は『雨が降っている、しかし私はそのことを信じていない』と私が言う」と仮定しよう」とは異なる。

まず、(1)' の「主張と仮定の非対称性」について確認しよう。

ムーアのパラドックスは、次のように表現できる。「私は p と信じている」は、「 $\vdash p$ 」とほぼ同じことを述べている。しかし、「仮に私が p と信じているとしたら……」は、「仮に p としたら……」とほ

ぼ同じことを述べているわけではない。

【RPP- I -478】

仮定の場合、内部に関すること〔＝私は p と信じている〕と外部に関すること〔＝ p 〕についての 2 つの命題は全く独立(unabhängig)である。しかし、主張の場合はそうではない。 【RPP- I -490】

ムーアのパラドックスは、次のように表現することができる。「私は事態がしかじかであると信じている」という表出は、「事態はしかじかである」という主張に似た仕方で使われる。しかし、事態はしかじかであると私は信じている、という仮定は、事態がしかじかであるという仮定に似た仕方で使われるわけではない。

【PI- I , x , p. 190】³⁾

マルカムは【RPP- I -478】を、「私は p と信じている」と「私が p と信じていると仮定しよう」との間の論理的差異がないとしたら、M - 文は無意味なものではないだろう、ということの意味している、と読む⁴⁾。例えば、「『雨が降っている、しかし私はそのことを信じていない』と仮定しよう」においては、雨が降っていることと、そのことを私が信じていないこととは「全く独立」であって、両立可能である。なぜなら、雨が降っていることは、私が表明した私の信念としてではなく、客観的な事実として措定されることになるからである。この仮定のもとでは、雨が降っていることが確認されているにもかかわらず私はそのことを信じていない、という事態が想定されるわけである。他方、「雨が降っている、しかし私はそのことを信じていない」と私が言う場合、「雨が降っている」と「私は、雨が降っていると信じていない」という 2 つの文は「独立」ではない。両者は矛盾するのである⁵⁾。

ここでマルカムは「仮定」と「主張」との非対称性を指摘しているにもかかわらず、後述するような、ウィトゲンシュタインが想像した「私の分裂」の可能性に着目していない。それゆえに、マルカムの解釈は極めて浅薄なものになってしまっている。

次に、(2)' について確認しよう。「ムーアのパラドックス」は現在時制でのみ生ずるのであって、一人称の信念表明における現在時制と過去時制との間には非対称性がある。マルカムは、「過去時制に基づく論証」すなわち、「私は p と信じている」と「私は p と信じていた」とは時制のみが異なっていると前提する論証は、誤った前提に基づいている、と指摘する。というのは、「私は p と信じている」は「 p 」を控えめに、あるいは「私は」を強調して主張するために用いられるのに対して、過去時制の「私は信じていた」は決して「 p 」の主張ではないからである⁶⁾。

最後に、(3)'、すなわち、「ムーアのパラドックス」は一人称でのみ成立するという根本的特徴について確認しよう。「ムーアのパラドックスは、最も根底的なレベルでは、一人称単数現在時制の『信じる』の通常の用法と、三人称形式の『信じる』の用法との間の本質的差異に由来している」というのが、マルカムの結論である⁷⁾。

マルカムは、M - 文がなぜ「自己矛盾的」なのかについて、以下のような説明を加えている⁸⁾。ただし、マルカムが取り扱っているのは、「私は p と信じている、しかし p ではない」という形式の文である。

- ① 「私は p と信じている」は、「私の心的状態」についての報告、記述ではなく、「 p 」の慎重な、ないしは控えめな主張(a cautious or hesitant assertion)である。
- ② すると、「私は雨が降っていると信じている、しかし雨は降っていない」は、「雨が降っている」の主張であり、かつ否定であることになる。
- ③ 「私は雨が……」は、自己矛盾的な文が通常持っている不整合を持っている。文を構

成する 2 つの部分が、互いに他方を相殺してしまう。その結果、全体としてナンセンスとなる。

このような、「私は p と信じている、しかし p ではない」という形式の M - 文がなぜ「自己矛盾的」であるのかということについてのマルカムの説明は、不十分なものである。つまり、「私は雨が降っていると信じている」は「雨が降っている」の「控えめな主張」であるから、後半の「雨は降っていない」という主張と「互いに他方を相殺してしまう」ことになる、と彼は言っているだけなのである。ところが、マルカムは別の論文では、M - 文が「自己矛盾的」であるのはなぜなのかを、より明確に述べている⁹⁾。すなわち、一般に、「私は p と信じているが、 p ではない」という形式の M - 文の、前半部分である「私は p と信じている」は、「 p 」の「慎重な、ないしは控えめな主張」であり、後半部分では「 p でない」と主張されるのだから、M - 文の中では「 p 」と「 p でない」という相反する 2 つの主張が同時になされていることになる。したがって、M - 文は全体として「自己矛盾的」な文になっている、というのである。つまり、「私は雨が降っていると信じている」は「雨が降っている」の「控えめな主張」であるから、これはその直後に続く「雨は降っていない」という主張と「互いに他方を相殺してしまう」ことになる、というのである。

マルカムの解釈は「私は p と信じている、しかし p ではない」という形式の M - 文についてのものであるから、この解釈を「 p 、しかし私は p ということをして信じていない」という形式の M - 文に当てはめるためには、①と②をそれぞれ次のように言い換える必要がある。

- ①' 「私は p と信じていない」は、「 p でない」の慎重な、ないしは控えめな主張である。
- ②' すると、「雨が降っている、しかし私は雨が降っていると信じていない」は、「雨が降っている」の主張であり、かつ否定であることになる。

M - 文は「 p 」と「私は p と信じていない」の連言と見なすことができるから、これら 2 つの連言肢の間に「衝突(conflict)」がある。この「衝突」は、2 つの信念間の矛盾というよりは、2 つの主張間の矛盾である。この「衝突」は、「 p 」という最初の連言肢によって含意される、あるいは表現されると考えられる信念と、「私は p と信じていない」という 2 番目の連言肢において示されている信念との間の矛盾なのではない。そうではなく、この「衝突」は、最初の連言肢における「 p 」の「無条件の主張」と 2 番目の連言肢における「 p でない」の「控えめな主張」との間の衝突である。一つの M - 文の中で「 p 」と「 p でない」という相反する 2 つの主張が同時になされているがゆえに、連言全体として自己矛盾となり、不条理であるだけでなく理解不可能でもある、とマルカムはいうのである¹⁰⁾。

このようなマルカムの解釈は、一見もっともらしく思える。しかし、われわれとしては、マルカムの解釈においては「含意」についてのムーアの考察の眼目が捉えられていないと言わざるを得ない。というのは、マルカムは、M - 文の中で 2 つの主張の間に「衝突」が生じることを指摘するに留まっていて、ムーアが「主張してはいないが、含意している」というときの「含意」を全く考慮していないように思われるからである。マルカムは、「主張」と「主張」との間の矛盾関係だけに囚われていて、その主張をする「私」すなわち発

話主体と「私の信念」との関係の適切な分析にまで到達していないのである。「私は雨が降っていると信じている」は「雨が降っている」の「控えめな主張」であるとマルカムは指摘した。しかし、ムーアは、「私は雨が降っていると信じている」とだけ「言う」ことの効果ではなく、「雨が降っている」とだけ「言う」ことの「含意」に着目したのだった。マルカムは、

〈H〉私が「私は p と信じている」と言うとき、私は p ということを控えめに主張している。

と指摘しているだけなのである。これに対して、ムーアは、

〈I〉私が「 p 」と主張するとき、私は同時に「私は p と信じている」ということを、明言してはいないが含意している。

という洞察を示したのである。

要するに、「雨が降っている」と私が主張するとき、「私は雨が降っていると信じている」ということを私は「含意している」という文法的事実にこそ、われわれは注目すべきなのである。なぜなら、私は「雨が降っている」と言うことによって、雨が降っているという信念を持っていると通常は見なされるからである。ここでわれわれは、すでに引用した、「主張は信念を含意する」というオースティンの定式を思い出す必要がある。「ムーアのパラドックス」の眼目は、「話者自身の信念と話者との関係」にこそある¹¹⁾。この意味で、「ムーアのパラドックス」はすぐれて語用論的なパラドックスであると言えよう。そして、M - 主張をすることを禁ずるのは、意味論的規約というよりは、語用論的規約なのである。

「話者自身の信念と話者との関係」が問題になるということは、話者自身による信念の自己帰属ではなく、第三者による信念帰属が問題になるということに他ならない。マルカムは、一人称の形式と三人称の形式における信念帰属の方法の違いに着目していないわけではない。しかし、人称の違いについての彼の考察は不十分なものである。

ウィトゲンシュタインは次の事実をわれわれに思い起こさせたのである。すなわち、通常私がある人について「彼は p と信じている」と言うのは、彼を観察することに基づいているのに対して、通常私が「私は p と信じている」と自分自身を観察することに基づいて言うことはない¹²⁾。

「信じる(信じている)」の用法に注目し、信念帰属に関する一人称と三人称の差異を「観察」に求めたマルカムの解釈は、健全であるように思われる。しかし、ここにも難点がないわけではない。ムーア自身が、そして後にオースティンが、「パラドックス」を「含意」の問題として捉えているのに対して、マルカムはやはりこの「含意」に対して注意を払っていないように見えるのである。この点が、マルカムの解釈が持つ難点の一つであった。

また、マルカムは、「このパラドックスは『私は p と信じている』という言明が自己観察と回想に由来する場合(こういうことは時々起こるが)においてさえ、存在しない」と述べている¹³⁾。

私が少し前に言ったことやおこなったこと、私の反応の仕方を思い出し、その回想だけに基づいて、「私は p と信じているように見える(It appears that I believe p ; I seem to believe p)」とか「すると私は p と信じている(So I believe p)」と叫ぶならば、「しかし p ではない」と付け加えても不条理さはな

い。不条理でないのはなぜかと言えば、私は私自身について私があたかも他者であるかのような(*as if*)語り方をしているからである。

この点は確かにマルカムの言う通りである。しかし、彼はこの論点を十分に展開していないのである。なぜなら、後に述べるように、ウィトゲンシュタインは、「私自身について私があたかも他者であるかのような語り方をしている」場合について、「超自我」や「自我」などの「審級」を登場させながら極めて興味深い断片を書き残しているからである。ここでは、われわれの「通常の言語ゲーム」のあり方をよりいっそう鮮明に描くために、非日常的な言語ゲームの中で M - 文がどのような形で使われうるのかが想像されている。この仮想的言語ゲームの不条理さを示すことによって、「通常の言語ゲーム」の中では M - 文は決して使われないことを、ウィトゲンシュタインは指摘しているのである。

ウィトゲンシュタインの「審級ゲーム」について見る前に、次節では、「話者自身の信念と話者との関係」について、認識様相の論理という道具立てを用いたヒンティッカの論証を検討してみる。

IV 認識様相の論理を用いたヒンティッカの論証

ヒンティッカは「ムーアのパラドックス」を、「言っていて、しかも信じていないということ(saying and disbelieving)」の問題として捉えた。ヒンティッカは、M - 文すなわち

① 「 p 、しかし私は p ということを信じていない」
が不条理であることを、次の②が「弁護不可能(*indefensible*)」であることを証明することによって、示している。

② 「私は事実が以下の通りであるということを信じている。すなわち、 p 、しかし私は p ということを信じていないということ(I believe that the case is as follows : p but I do not believe that p .)」

ここで、「弁護可能性」は整合性の代わりに、「弁護不可能性」は不整合性の代わりに用いられている。M - 文を発話することは、論理的整合性(弁護可能性)を侵犯するのではなく、「発話者は自分が言っていることを信じているか、あるいは少なくとも多分信じることができるだろう、という一般的推定(*general presumption*)」を侵犯することになるというのである¹⁾。

この②は、「 a は p ということを信じている」を Bap と表せば、次の形式である。

②* “ $Ba(p \ \& \ \sim Bap)$ ” .

ヒンティッカは、②* の「弁護不可能性」を、文の集合としての可能世界モデルを用いた背理法によって証明している²⁾。すなわち、②*がある可能世界 μ において真である、言

い換えれば、②*が μ に属すると仮定したうえで、この「反仮定(counter assumption)」から矛盾を導出している。つまり、発話者の信念を表す文の集合に相矛盾する2つの文が属することになるという帰結を示すことによって、②*の「弁護不可能性」を証明したのである。

ヒンティッカの議論の眼目は、M - 文を用いる発話者自身がM - 文の表す信念を持つことは不可能だという「事実」にある。ヒンティッカは、①の不条理性を、M - 文の表す信念を「発話者自身が信じることが不可能であるという事実」に立脚して説明している³⁾。この「事実」は、日常言語の文法的事実ではなく、モデル集合の集合すなわち「モデル系(model system)」という概念、様相論理の意味論の道具立てを用いてこそ明らかになる「事実」である。そして、ここでM - 文が信念の対象とされる「高階の『信じる』」、「2階の信念」という極めて不自然なものが導入されていることに、われわれは注意しなければならない。

②*は、さらに

②** “Ba p & Ba($\sim$ Ba p)”

と変形できる。ここで、Ba($\sim$ Ba p)に注目してみよう。これは、aを「私」とすれば、「私は、私が p とは信じていないということを信じている」を表す。しかし、このようなBa($\sim$ Ba p)という形式をもつ文およびBaBa p の形式を持つ文が日常生活において有意味な文なのかどうか、「自分の信念についての信念」を表明することに意味があるのかどうかは、おおいに疑問である。例えば、 p に「火星には生命が存在する」を代入してみよう。すると、BaBa p は、「私は、火星には生命が存在すると信じていると信じている」となる。そして、Ba($\sim$ Ba p)は、「私は、火星には生命が存在すると信じていないということを信じている」となる。これらは、われわれの日常的な言語実践において、いかなる役割を与えられうるのだろうか。火星に生命が存在するかどうかについて自分の信念を表明するためには、「私は、火星には生命が存在すると信じている」、または、「私は、火星には生命が存在するとは信じていない」などと言うだけで十分なのである。それぞれに「…と信じている」という認識的オペレータをもう一つ付加するのは、冗長であるだけでなく、無意味であろう。自分の信念「についての」信念、すなわち「メタ信念」を発話者に帰属させることは、日常的な言語実践ではありえないからである。勿論、M - 文自体が人工的で不自然なものではあるが、ヒンティッカの論証における「2階の信念」の導入もまた人工的であることは否めない。彼は、M - 文の不条理性を示すために、「自分の信念についての信念」という視点を導入したのであった。しかし、この「自分の信念についての信念」、すなわち「メタ信念」の帰属という着想そのものがすでに不条理なのではないだろうか？ 様相論理の意味論の道具立てを用いた、「メタ信念」の帰属という迂回路は、本当に必要なのだろうか？ われわれとしては、この迂回路は奇妙で不条理であり、したがって不必要であると言わざるを得ないのである。

M - 文が表す信念内容は「私」の信念の対象にはなりえないということが、ヒンティッカの論証の結論であった。しかし、彼はその論証の過程で「自分の信念についての信念」、すなわち「メタ信念」に頼っているのであった。「…と信じていると信じている」という多

重認識様相ないし多重 - 命題態度は、不自然さという点では、M - 文と同様であろう。

とはいえ、「発話者は自分が言っていることを信じているか、あるいは少なくとも多分信じていることができるだろう、という一般的推定」こそは、オースティンやサールが言語行為の原則として注目したものに他ならない。この「一般的推定」は、日常会話における根本原則であり、それ以上は正当化不可能なもの、ウィトゲンシュタインの「世界像(Weltbild)」の如きものでもあろう。また、ムーアは、誠実な主張がなされることは「一般的真理(general truth)」であって、不誠実な主張、すなわち嘘は例外的だと考えていたように見える⁴⁾。

V 「審級ゲーム」と発話主体の概念

以上のように、ムーアが言うところの「一般的真理」、ヒンティッカの言う「一般的推定」こそ、「主張の論理」の根本にある「常識」に他ならないと考えられる。しかし、この「主張の論理」には、まだ別の側面が隠されている。それは、「ひと」や「人格」という概念に関わる側面であり、発話主体の身体とも不可分なものである。この側面について、ウィトゲンシュタインのテキストに即して、考察を進めていくことにしよう。

ウィトゲンシュタインの関心は、「含意」の事実というよりもむしろ「信じる」の文法にあり、さらに言語ゲームを営む「私」にあった。われわれとしては、彼の思考の筋道を辿りながら、「主張する」主体、信念を持つ主体に関する日常的了解、「ひと」の概念を少しでも解明したいのである。

『心理学の哲学』第1巻には、以下のような興味深い断片が見出せる。

私が、「私は、雨が降っていると信じていない。だが、雨が降っている」と述べることのできる複合的人間(das Zwitterwesen)であるとしてみよう。——しかし、こうした言葉はいかなる目的の役に立つのか。そうした言葉についてどのような使用法を想像することができるだろうか。

「彼は来る。私個人としては(persönlich)そのことを信じていない。しかし、このことは気にしないでくれ給え。」——「彼は来る。大丈夫だ。私は彼が来ることを信じてはいないが。しかし、このことは気にしないでくれ給え。」これは、あたかも二人の人物(zwei Personen)が私の口で話しているかのように聞こえる。あるいは、私の内部にある一つの審級(eine Instanz in mir)が他人に対して彼が来ることを報告し、そしてこの審級は他人にその報告に応じた行為をさせることを望んでいる——ところが、一方で別の審級がある意味で私自身の振る舞いを告知しているかのように聞こえる。それはちょうど次のように言うようなものである。「私はこの行為の仕方が誤っていることを知っている。しかしまた、私がこのように行為することも知っている」と。

したがって、「彼は来る、しかし私は彼が来ることを信じていない」という言明は、ある言語ゲームの中に現われうる。あるいは、より正確に言えば、その中ではこれらの言葉がわれわれにとって不条理(absurd)とは思えないような言語ゲームを考え出す(ausdenken)ことができるのである。

【RPP- I -495】

私の超自我(Mein Über-Ich)は、私の自我について(von meinem Ich)、「雨が降っている。そして、自我(das Ich)はそのことを信じている」と言うことができるかもしれない。そしてさらに、「だから私

は多分傘を持っていくだろう」と続けて言うことができるかもしれない。では、このゲームはそれからどのように進行するのか。【RPP- I -708】

これらの断片に登場する、M - 文を有意味なものとして用いるような言語ゲームを、「審級ゲーム」と呼ぶことにしよう。勿論、「審級」や「超自我」は、フロイトが精神分析学において用いた概念である。フロイトによれば、心は「エス」、「自我」、「超自我」という3つの「審級」が形成する構造を持ち、「超自我」は「自我」を監視する役割を受け持つ¹⁾。ウィトゲンシュタインがこの「審級」概念を借りて想像した「審級ゲーム」のプレイヤーは、3つの「審級」を下部構造とする「複合的人間」である。より正確に言えば、この仮想ゲームのプレイヤーは、通常の「私」ではなく、複数の「審級」なのである。この「審級ゲーム」という一種の背理法的思考実験を手掛かりにして、言語ゲームを営む主体の概念、「ひと」の概念の単一性と統一性が明らかにされるわけである²⁾。

「複合的人間」は、ウィトゲンシュタインの背理法において重要な役割を担う仮構である。そして、この仮構の不条理性が導かれることによって、日常的な世界において「通常の言語ゲーム」を営む主体が、固有の身体を備えた、単一で「分割不可能なもの＝個人」であることが鮮明になってくる。日常的な世界においては、「ひと」ないし「人格」は単一で統一性を保っているということが、暗黙の了解とされているのである。

この「複合的人間」は、「私」という発話主体の分裂という深刻な事態を表しているとも言える。

「雨が降っているが私はこのことを信じていない、と仮定せよ。」——この仮定(Annahme)が仮定すること〔雨が降っているが私はこのことを信じていない〕を私が主張するとき、——私の人格(meine Persönlichkeit)は、言わば分裂する(spaltet sich)。

「その場合に私の人格は分裂する」とは、その場合に私はもはや通常の言語ゲーム(das gewöhnliche Sprachspiel)をしているのではなく、別のゲームをしている、ということを意味する。【RPP- I -820】

マルカムは「仮定」と「主張」との非対称性を指摘しているにもかかわらず、このような「私の人格の分裂」の可能性にまでは着目していなかった。マルカムの解釈は「信じる」という表現の日常的用法に即した穏健なものではある。確かにウィトゲンシュタインは日常言語の「信じる」の文法を示したのだが、彼は「信じる」の日常的用法をただありのままに記述して考察したわけではなかった。われわれの「通常の言語ゲーム」のあり方をより鮮明に描くために、非 - 日常的な言語ゲームである「審級ゲーム」の可能性を想像しているのである。すなわち、背理法的思考により、「私」と「信じる」を用いる通常の言語ゲームのありようを明確にしたわけである。

上に引用した断片では、M - 文を有意味なものとするためには「審級ゲーム」を「考え出す」必要があり、話し手の人格を単一とする暗黙の前提を崩さなければならなくなることで、つまり話し手を「複合的人間」と見なさなければならなくなり、人格の分裂という不条理な帰結をもたらすことが示されているのである。ここで、ウィトゲンシュタインの用いた背理法の大枠を再構成してみよう。

- ① 「 p 、しかし私は p ということを信じていない」という M - 主張は有意味なものである、と仮定しよう。
- ② すると、 M - 主張をする者は人格が分裂した「複合的人間」であると見なさざるを得ないことになる。そして、「複合的人間」は「審級ゲーム」を営んでいることになる。
- ③ しかるに、発話主体の「人格の分裂」は、「通常の言語ゲーム」の観点からは不条理なことである。
- ④ したがって、①の仮定が誤っている。 M - 主張は有意味なものではない。 M - 文は「通常の言語ゲーム」では決して使用されないものであり、「通常の言語ゲーム」は発話主体の人格の単一性と統一性を根本的前提とするものである。

「通常の言語ゲーム」を営む主体は、カント的な主体であり、近代的個人である。原子論的な個人、すなわち単一で分割不可能な「個人(in-dividuum)」という概念が、近代以降の社会の根幹にある。主張したり約束したりする主体の基本的単位は、個人なのである。しかるに、この「個人」概念を根本的前提とする「通常の言語ゲーム」の実践は、「審級ゲーム」の可能性を認めることによって、破綻してしまうだろう。「審級ゲーム」の混入は、「通常の言語ゲーム」にとって脅威となるのである。なるほど、「複合的人間」が孤立した状態で営む「審級ゲーム」内部では、 M - 主張は不条理なものではないだろう。「審級ゲーム」が「私」の内部で営まれる限りは、取り立てて問題はないように見えるのである。では、「複合的人間」が自分以外の誰かに向かって M - 主張をする場合には、いかなることが起こるだろうか？ 「私」ではなく「私の自我」「自我」を主語とする文節を含む、「雨が降っている、しかし自我はそのことを信じていない」のような主張は、それを聞く「私」以外の個人にとってはまったく理解不可能なものであるに違いない³⁾。あるいはまた、「彼は来る。私個人としてはそのことを信じていない。しかし、このことは気にしないでくれ給え」のように、「私の内部にある一つの審級が他人に対して彼が来ることを報告し、そしてこの審級は他人にその報告に応じた行為をさせることを望んでいる——ところが、一方で別の審級がある意味で私自身の振る舞いを告知しているかのように聞こえる」(【RPP-I-495】)言い方は、聞き手を混乱させるだけである⁴⁾。そして、「審級ゲーム」を約束の場面にまで拡張して考えてみると、問題が尖鋭化することがわかる。例えば、「私は今月末までにあなたからの借金を全額返済することを約束する、しかし私の自我はこの約束を果たすつもりはまったくない」と「私」が借金を返済すべき当の相手に言う場合、通常の意味での約束がなされたことにはならないであろうし、話し手の意図が不明なのである。

「審級ゲーム」は、先に引用した【RPP-I-708】に見られるように、「複合的人間」内部の各審級が参加して営まれるものである。すなわち、「審級ゲーム」の発話主体は、単一の「私」ではなく、複数の「審級」である。これに対して、「通常の言語ゲーム」における主張や約束の主体は、単一で統一性を保つ「ひと」ないし「人格」であり、通常の信念帰属や責任の帰属においては、「心の分割」はおこなわれず、「人格の分裂」の可能性は考慮されない。例えば、「彼女は嘘をついている」、「彼は、はじめから約束を守るつもりなどないのに、『約束する』と言った」などと非難する場合、その彼女や彼の「人格」を分割する

には及ばないのである。そして、通常の信念帰属や責任帰属は、発話主体である個人の行動と身体から切り離せない。

「私」は、自分の言葉に責任を持つことを要求される。そして、その「私」の身体は一つだけである。「私」の身体は唯一無二であり、「二人の人間が私の口を借りて話している」ということを示すような振る舞いは、通常は見出せない⁵⁾。各審級がそれぞれ別個の身体を所有し、支配しているわけではない。また、嘘をつく「私」は、嘘をついていないときの「私」とは別人なのではなく、同一人物なのである。

「私」が「 p 」と主張するとき、「私」には p という信念が帰属させられる。「私」が「 p 」と主張するとき、「私」は p ということを信じていると見なされる。「 p 」と主張する発話者には、通常、 p という信念が帰属させられるのである。そして「私」は、「 p 」と主張すれば p という信念が帰属させられることを知っているがゆえに、 p という信念を持っていないときでも、 p という信念を持っていると見なされたほうが自分にとって好都合だと思えば、敢えて「 p 」と主張する。「私」が「 p 」と信じていないにもかかわらず「 p 」と主張する場合、「 p 」と信じていないことが発覚したならば、「私」は「不誠実」ないしは「嘘つき」という誹りを免れない。このこと自体が、「主張は信念を含意する」という、信念帰属に関する「規約」の強固さを示している。「主張は信念を含意する」ことが信念帰属の原則、規範であって決して例外でないことが、日常生活では前提されているのである。そして、「主張」という言語行為をおこなう者には、誠実であることが要求されている。

勿論、「私」が「 p 」という「主張」と「私は p と信じていない」という「主張」とを一息に、ほぼ同時に連続しておこなったのではなく、一日、一週間後、一ヶ月後……のように時間的間隔をあけておこなったのなら、そこには逆説的なこと、不条理なことは何もない。「私」には「嘘つきだ」、「誠実でない」、「二枚舌」、「いい加減なことを言う」といった厳しい評価が下されるだけである。あるいは、「彼には裏表がある」、「どれが彼女の本音なのかかわからない」、「あの人は相手によって言うことが違う」などと言われるだろう。このような評価は、発話主体である「私」の認識能力に対する評価ではなく、対人関係における評価、すなわち倫理的評価である。しかし、M - 文を使って、「 p 」という「主張」と「私は p と信じていない」という「主張」とを同時に、しかも「誠実に」おこなっているとしか思えないような「私」に対しては、「信じる」という動詞の使用法がわかっていない、という評価が下されるかもしれない。さらには、「人格が分裂している」といったことが言われることもありうるだろう。このような、発話主体たる「私」の「人格の統一性」が問題になる局面こそ、ウィトゲンシュタインが想像した「審級ゲーム」との接点なのである。オースティンとサールは発話主体の「誠実性」に着目したが、ウィトゲンシュタインはむしろ発話主体である「私」の「統一性」と「私」の身体との関係という観点から、M - 主張に「パラドックス」を見て取ったのだった。

M - 主張の逆説性を解消するための背理法的思考実験においてウィトゲンシュタインは、フロイトの構造論を応用して個人の心に階層構造を設定し、言語ゲームを営む主体の「人格」を分裂させてみたのだった。人格の分裂という仮構は、われわれの「通常の言語ゲーム」の実践とはかけ離れたものである。しかし、ウィトゲンシュタインは、「複合的人間」を思考実験に登場させ、その不自然さ、不合理さを示すことによって、「通常の言語ゲーム」ではほとんど自明のものとされている「私」、「ひと」、「人格」、「主張」、「信念」などの語

の使い方を、間接的に明らかにしたわけである。人格の分裂を仮構すれば、なるほど M - 主張の有意性を確保することが可能にはなるだろう。しかし、人格の分裂を仮構することは、「通常の言語ゲーム」における暗黙の了解、すなわち発話主体の人格を単一とする根本的前提を崩すことに他ならない。この代償は大きすぎるものである。つまり、言語ゲームを営む主体は「複合的人間」内部の審級でもあることになり、極めて不合理な事態がもたらされるということを、ウィトゲンシュタインは示したのである。

ウィトゲンシュタインの言う「主張の論理」は、主張する「私」が分割不可能な個人であることを要請するものなのである。日常的な世界において「通常の言語ゲーム」を営む主体は、身体を備えた、単一で分割不可能な「私」である。「私」は、単身で主張する。「私」は、真剣に主張するときも、嘘をつくときも、常に単身で主張するのである。

(注)

I

- 1) Malcolm [1984] p. 56. [邦訳 p. 111.]
- 2) Wittgenstein [LRKM] 'LETTERS TO GEORGE EDWARD MOORE 1913~1948', October 1944, p. 177.
- 3) Wittgenstein [VB] 1948 年の断片。

II

- 1) 'I believe that p , but not- p .' という形式を持つ文も「M - 文」に他ならない。しかし、本稿では議論を簡素化するために、基本的には ' p , but I don't believe that p .' の形式を持つ文について考察を進めることにする。

トーマス・ボールドウィンは、ムーアが「ラッセルの『記述理論』」の中で挙げている 'I believe he has gone out, but he has not.' という例文は、' p but I believe that not- p .' という形式であると言う。ムーアはパラドックスを 2 つの形式で提示したというのである (Baldwin [1990] p. 227)。しかし、この例文は 'I believe that p , but not- p .' という形式をもつと見るのが自然であろう。

'believe that p ' は、本稿では便宜的に、「 p と信じている」、「 p ということを信じている」などと訳すことにする。しかし、「 p と思う」とするほうが、日本語を母語とする話者の語感には合うかもしれない。というのは、日本語の表現としては「…と信じる」や「信念」はかなり強い表現であり、自分の生き方や宗教的な信条・信仰が語られる場面で用いられることが多いからである。ちなみに、「少年 A が Y 事件の犯人であると報道されている。しかし私は彼が犯人ではないと信じている」、「少年 A が Y 事件の犯人であると報道されている。しかし私は彼が犯人ではないと信じたい」などと言う場合は、明らかに M - 主張の事例ではない。

2) cf.

- ・ウィトゲンシュタインがムーアに対して挙げた、無意味(nonsensical)でない事例
- ①「私は雨が降っているとは思っていないが実際には雨が降っている、ということは十分

ありうる。」‘**It's quite possible that** though I don't believe it's raining, yet as a matter of fact it really is.’ [太字にしての強調は引用者]

②「もしも、私は雨が降っているとは思っていないが実際には雨が降っているのならば、私は思い違いをしているのだ。」‘**If I don't believe it's raining, but as a matter of fact it really is, then I am mistaken in my belief.**’ [太字にしての強調は引用者]

③ある人に向かって、「私は雨が降っているとは思わない」‘I don't believe it's raining.’ とはっきりと聞こえるように言った直後に、自分の脇にいる別の人に、「本当は雨が降っているのだ」‘**As a matter of fact it really is raining.**’ とそっとささやく場合。

・ウィトゲンシュタインがムーアに対して挙げた、「ムーアのパラドックス」と類似性を持つ背理の事例

④「ひょっとしたら雨は降っていないかもしれないが、実際は雨が降っている。」‘Possibly it isn't raining, but as a matter of fact it is.’

⑤「雨が降っていることは確かではないが、実際は雨が降っている。」‘It isn't certain that it's raining, but as a matter of fact it is.’

(‘MOORE'S PARADOX’ 1944? in Moore [1993] pp. 207-212.)

3) Searle [1970] p. 65 n. , [1983] p. 9.

4) Searle [1970] p. 65. [邦訳 p. 128.]

5) Austin [1962] p. 49. [邦訳 p. 86.]

6) Lepore [1991] p. 187.

7) Moore [1942] ‘A Reply to My Critics’ , p. 543.

8) *ibid.*, p. 541.

「含意」の働きは、事実を主張する文だけでなく、倫理的評価を表す文についても指摘されている。例えば、「ブルータスがシーザーを刺したのは、正しかった(It was right of Brutus to stab Caesar.)」という文を発話する者は、ブルータスの行為を「是認している」と「言っている」わけではないが、ブルータスの行為を是認しているということを「含意している」という。

ちなみに、グライス、ムーアによる ‘imply’ は「言葉の自然な使用(a natural use of language)」ではない、と見なしている(Grice [1989] p. 42)。

9) Moore [1942] p. 541.

10) *ibid.*, p. 543.

11) Austin [1962] p. 49. [邦訳 p. 86.]

12) *ibid.*, p. 49. [邦訳 p. 86.]

13) Austin [1979] ‘The Meaning of a Word’ , p. 64. [邦訳「語の意味」 p. 85.]

この捉え方は、「ムーアのパラドックス」は論理的矛盾と類似してはいるが、それと全く同じであるわけではない、というウィトゲンシュタインの洞察と共通点を持つ。

「語の意味」は、「1940 年ケンブリッジのモラル・サイエンス・クラブとオックスフォードの Jowett 研究会で講演されたものである」という(『哲学論文集』第二版への序文, p.vi.; 邦訳 p.vii.)。ウィトゲンシュタインは 1944 年にムーアの講演を聴いたのだった。ならば、オースティンは、「ムーアのパラドックス」という呼称こそ用いてはいないものの、ウィトゲンシュタインより少なくとも 4 年早く、このパラドックスに注目していたこと

になる。

また、オースティンは、「ある意味論的な規約」としているが、「われわれが様々な語を様々な状況において用いる方法についての」という点を強調するなら、より正確には、「ある語用論的な規約」とすべきだっただろう。

14) Moore [1942] p. 543.

III

1) マルカムには「ムーアのパラドックス」を扱った 2 つの論文がある(Malcolm [1991]、[1994])。両者の間には、表現の仕方、強調点の違いはあるにしても、基本的には考え方の変化はない。ただし、前者の論文はサールへの批判が中心である。

2) Lepore [1991] p. 163.

3) ウィトゲンシュタインは、1944 年 10 月にモラル・サイエンス・クラブでのムーアの講演を聴いた後にムーア宛に書いた手紙の中で、早くも「仮定」と「主張」との差異を指摘している。「次のように仮定(suppose)してみよう。p ということが成立しているが私は p と信じていない、と」は有意味であるのに対して、「p ということが成立しているが、私は p と信じていない」は「意味をなさない」という。(Wittgenstein [LRKM] LETTERS TO GEORGE EDWARD MOORE 1913~1948, October 1944, p. 177.)

なお、『心理学の哲学』第 1 巻は、「編者まえがき」によると、1946 年 5 月 10 日から 1947 年 10 月 11 日までの期間にわたる日付けの手書き原稿をもとにしたタイプ原稿を公刊したものである。

4) Malcolm [1995] p. 199.

5) 勿論、「雨が降っていると言われている。しかし、私は個人的にはそう信じたくない」と言うことはできる。しかし、このように言うことは、「雨が降っている、しかし私はそのことを信じていない」と言うこととは厳密に区別されなければならない。

6) Malcolm [1995] p. 198.

7) *ibid.*, p. 206.

8) *ibid.*, p. 204 の例を若干改変。

9) Lepore [1991] p. 166.

10) *ibid.*

11) 「スタルネイカーが指摘しているように、〔ムーアのパラドックスの〕根本問題は、話すことではなく『信念自体であり、しかも話者自身の信念と話者との関係なのである』。」(Goldstein [1999] p. 105.)

12) Malcolm [1995] p. 206.

13) *ibid.*, p. 206.

IV

1) Hintikka [1962] p. 67. [邦訳 p. 84.]

2) *ibid.*, p. 69. [邦訳 p. 86.]

3) *ibid.*, p. 70. [邦訳 p. 87.]

4) Moore [1959] p. 176.

ムーアは嘘を、原則に対するたんなる例外と見なしていたようである。しかし、私見によれば、「主張は信念を含意する」という原則があるにもかかわらず人々は往々にして嘘をつくのではなく、まさにこの原則があるがゆえにこそ嘘をつくことが可能になっていると捉えるべきである。

V

1) ウィトゲンシュタインのフロイト解釈が妥当なものであるかどうかをフロイトのテキストと突き合わせながら検証することは、本稿の射程外にある。

「審級」については、『精神分析用語辞典』(J. ラプランシュ/J. -B. ポンタリス著、村上仁監訳、みすず書房、1977)の「審級」の項目に付加された〔訳注〕が参考になる。‘Instanz’は、

法律用語から転用された言葉であって、審級制度における第一審、第二審などの審に相当する。こんにちまでの邦訳では「審級」とも、あるいは「検問所」、「法廷」、または「場」、「心的力域」などと訳されてきた。裁判の階層性としての審級制度とその力動性に注目して、この用語を転用したフロイトの意を汲み、なじまない言葉であるが、「審級」を第一に、「心的力域」を第二に訳することにする。

また、「超自我」という「審級」については、フロイトが 1923 年に書いた『自我とエス』(Freud[1923])を参照されたい。

2) 所謂「多重人格」の問題と「ムーアのパラドックス」とを関連づけることも、本稿の主目的ではない。そこで、以下の点を指摘するにとどめる。

所謂「多重人格者」でさえ、M - 文を用いることはないだろう。「私の人格 1 は *p* と信じているが、私の人格 2 は *p* とは信じていない」と言う場合、この文が M - 文でないことは明らかだからである。ただし、「私が『*p*』と言った直後に、私の別人格 3 が『私は *p* とは信じていない』と言ったのだろう。もっとも、私は私の別人格 3 がそう言ったのを覚えてはいないのだが……」と、ある「多重人格者」が推測するようなことはありうるだろう。

3) 【RPP- I -708】では「自我(das Ich)は *p* と信じていない」という言い方が試みられているが、この「自我」という主語は、勿論、一人称ではない。そして、この発話は、一人称の主張ではなく、「自我」についての報告である。ここでは、「私(Ich)」という一人称の主語が「自我」という三人称(「準一人称」「似非一人称」と呼ぶべきかもしれない)の形態に置き換えられていることにより、ムーアが問題にした不条理さが解消したように見える。しかしながら、「自我」を主語とする「主張」自体が、少なくとも日常会話においては、不条理なのである。

4) cf. 【LSPP- I - 141-145】

5)

もし私が私の口から出て来る語りに聞き耳を立てるならば、他者が私の口を借りて話している、と言うことができよう。

「私の表出から判断するに、私はこのことを信じているのだ。」さて、この言葉が意味を持つような状況を考え出すことは可能である。

そしてまた、誰かが次のように言うこともありうるだろう。「雨が降っている、しかし私はそのことを信じていない」、あるいは、「私の自我(mein Ego)は雨が降っていると信じているように私には思える。しかし、雨は降っていない」、と。これらの言葉に対しては、二人の人間(Wesen)が私の口を借りて話しているということを示すような振る舞い(ein Benehmen)をわれわれは思い描かなければならないだろう。

【PI-II, x, p.

192】

この引用部分と重なる内容をもつ箇所が、1949年頃に書かれた草稿 MS169 に含まれている。

そしてまた、誰かが「雨が降るだろう、しかし私はそのことを信じていない」と言うこともありうるだろう。その際、二人の人(Personen)がその人の口を借りて語っているということを示す徴候(Anzeichen)があるだろう。この場合、なるほどわれわれが思い描くことはできても、通常は(für gewöhnlich)出合うことがないような言語ゲームが営まれていることになるだろう。

そしてまた、誰かが「雨が降っている、しかし私はそのことを信じていない」と言うこともありうるだろう。この言葉に対しては、二つの人格(Persönlichkeiten)がその人の口を借りて話しているということを示すような徴候をわれわれは思い描かなければならないだろう。

【LSPP p. 23】

引照文献(略称)表

Austin, John L.

[1962] *How to Do Things with Words*, Oxford University Press, 1962, 1975. [邦訳：『言語と行為』J. L. オースティン著、坂本百大訳、大修館書店、1978年]

[1979] *Philosophical Papers* (ed. by J. O. Urmson and G. J. Warnock), Oxford University Press, Third edition. [邦訳：『オースティン哲学論文集』J. L. オースティン著、坂本百大監訳、勁草書房、1991年]

Baldwin, Thomas

[1990] *G. E. MOORE*, Routledge.

Freud, Sigmund

[1923] 'Das Ich und das Es' (English Translation 'The Ego and the id' in Freud [1961], pp. 3-63.)

[1961] *THE STANDARD EDITION OF THE COMPLETE PSYCHOLOGICAL WORKS OF SIGMUND FREUD* Translated from the German under the General Editorship of James Strachey, volume XIX, The Hogarth Press. [邦訳：「自我とエス」小此木啓吾訳；

『フロイト著作集 6 自我論・不安本能論』井村恒郎・小此木啓吾他訳、人文書院、1970年、所収]

Goldstein, Laurence

[1999] *Clear and Queer Thinking* Wittgenstein's Development and His Relevance to Modern Thought, Rowman & Littlefield Publishers, Inc.

Grice, Paul

[1989] *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press.

Hintikka, Jaakko

[1962] *Knowledge and Belief* AN INTRODUCTION TO THE LOGIC OF THE TWO NOTIONS, Cornell University Press. [邦訳:『認識と信念——認識と信念の論理序説——』ヤーッコ・ヒンティッカ著、永井成男・内田種臣共訳、紀伊國屋書店、1975年]

Lepore, Ernest & Robert Van Gulick (eds.)

[1991] *John Searle and his critics*, Basil Blackwell.

Malcolm, Norman

[1984] *LUDWIG WITTGENSTEIN A MEMOIR*, with a Bibliographical Sketch by G. H. von Wright, Second edition with Wittgenstein's letters to Malcolm, Oxford University Press. [『放浪—回想のヴィトゲンシュタイン—』ノーマン・マーコム他、藤本隆志訳、法政大学出版局、1971年]

[1991] “I believe that *p*” in Lepore, Ernest & Robert Van Gulick (eds.) [1991].

[1994] ‘Disentangling Moore's Paradox’ (first appeared in *Wittgenstein* : Mind and Language, ed. Rosaria Egidi, Dordrecht : Kluwer Academic Publishers, 1994), reprinted in Malcolm[1995], pp. 195-206.

[1995] *Wittgensteinian Themes* Essays 1978-1989, edited by Georg Henrik von Wright, Cornell University Press.

Moore, G. E.

[1942] *The Philosophy of G. E. Moore*, ed. by P. A. Schilpp, Evanston, Northwestern University Press.

[1944] ‘Russell's “Theory of Descriptions”’, in *The Philosophy of Bertrand Russell*, edited by P. A. Schilpp (Evanston : Northwestern University Press), reprinted in Moore [1959], pp.151-195.

[1944?] ‘MOORE'S PARADOX’ in Moore [1993], pp. 207-212.

[1959] *Philosophical Papers*, Allen & Unwin.

[1993] *G. E. MOORE : SELECTED WRITINGS*, edited by Thomas Baldwin, Routledge.

Searle, John R.

[1970] *Speech Acts*, Cambridge University Press. [邦訳：『言語行為』J. R. サール著、坂本百大・土屋俊訳、勁草書房、1986 年]

[1983] *Intentionality*, Cambridge University Press.

Wittgenstein, Ludwig

【LRKM】*LETTERS TO RUSSELL, KEYNES AND MOORE*, edited with an Introduction by G. H. von Wright, assisted by B. F. McGuinness, Basil Blackwell, 1977.

【LSPP - I】*Letzte Schriften über die Philosophie der Psychologie Band I* Vorstudien zum zweiten Teil der *Philosophischen Untersuchungen*, herausgegeben von G. H. von Wright und Heikki Nyman, translated by C. G. Luckhardt and Maximilian A. E. Aue, Basil Blackwell, 1982.

【LSPP】*Letzte Schriften über die Philosophie der Psychologie* Das Innere und das Äußere 1949-1951, herausgegeben von G. H. von Wright und Heikki Nyman, Suhrkamp, 1993.

【PI】*Philosophical Investigations*, translated by G. E. M. Anscombe, Basil Blackwell, 1968. [邦訳：ウィトゲンシュタイン全集 第 8 巻『哲学的探究』、藤本隆志訳、大修館書店、1976 年；『哲学的探求 第 II 部 読解』黒崎宏訳・解説、産業図書、1995 年]

【RPP - I】*Remarks on the Philosophy of Psychology* vol. I, eds. G. E. M. Anscombe and G. H. von Wright, translated by G. E. M. Anscombe, Basil Blackwell, 1980. [邦訳：ウィトゲンシュタイン全集 補巻 1『心理学の哲学 1』佐藤徹郎訳、大修館書店、1985 年]

【VB】*Vermischte Bemerkungen*, edited by Georg Henrik von Wright in cooperation with Heikki Nyman, Basil Blackwell, 1977. [邦訳：ウィトゲンシュタイン著、『反哲学的断章』丘沢静也訳、青土社、1981 年]

※ 本稿は、日本論理哲学会第 3 回大会(1999 年 10 月 30 日、アルカディア市ヶ谷)において口頭発表した際の草稿に加筆したものである。